

近代国民国家インドネシアにおける博物館の設立とその役割

The Establishment and Role of Museums in the Modern Nation-State of Indonesia

ジャクファル・イドルス

Abstract

The purpose of this study is to clarify the role of museums in the formation of modern nation-states in Asia, focusing on the establishment of museum in Indonesia. Indonesia was colonized by the Dutch, and later emerged as independent nation-state. The concern of museum practice under Dutch colonial rule was reflected in policy and scholarship, and represented in museums. Museum practice in Indonesia is influenced and closely related to Dutch colonial museum practice.

After gaining its independence, Indonesia under Sukarno and Suharto adapted the museum-related practices to overwhelmed Indonesia's political challenges as a newly emerging nation-state, that is nation-building and national integration. Sukarno built monuments and museum-related spaces that drew from ancient heritage and ancient history to show the greatness of Indonesian people. On the other hand, Suharto build museums and museum-related spaces—the prominent one is Taman Mini Indonesia Indah—to highlight the Indonesian ethnic and cultural diversity.

This paper examines the development process and meaning of museums in Indonesia from the colonial state of the Dutch East Indies to post-independence as the Republic of Indonesia.

キーワード：国民国家の形成、博物館、ナショナリズム、インドネシア

Key words : nation-state building, museum, nationalism, Indonesia

はじめに

第二次世界大戦後、19世紀は国民国家の時代とも言え、多くの国家が誕生した。しかし、これらの国家の多くは植民地の影響で成立し、文化的・宗教的・民族的対立が顕著になった。東西冷戦後、国内紛争が増加し、国民国家の基盤が揺らぎ、その理論やシステムに歪みが生じ、再定義の必要性が生まれた。

ベネディクト・アンダーソンの研究は国民国家の再定義する先駆けとなった。国民はイメージとして描かれた政治共同体であり、本来的に限定され、かつ主観的なもの「最高の意思決定主体」として想像されると述べている¹。さらに「歴史家の客観的な目には国民が近代的と見えるのに、ナ

1 アンダーソン、ベネディクト（著）（2008）『定本 想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行』白石隆、白石さや（訳）書籍工房早山。

シヨナリストの主観的な目にはそれが古い存在と見える」と国民という概念の近代性と同時に捏造的な存在であると述べている。国民国家は18世紀のヨーロッパで誕生し、主権国家としての基本的な政治単位となり、帝国主義や植民地支配により世界に広がった。国際政治学者の山影進は、国家の主権者が国民であるとし、国民が国民国家において必要不可欠であることを強調している²。

しかし、国民は確実に存在しているものの、同時に非常に曖昧であり、国民国家の理論において国民不在の国民国家は成立しないとされている。アンダーソンの言うように、国民が「イメージされたもの」であるならば、それは非常に不安定な存在であり、国家の存続を脅かす存在へと転化しても不思議ではない。「国民」とは国民国家の成立の重要な要因であると同時に、破壊要因でもあると言えるであろう。

国家は国民形成が絶対条件であり、国旗や国歌、学校教育を通じて国民概念を強化している。アンダーソンはアジアやアフリカの植民地国家において公定ナショナリズムが重要な役割を果たし、人口調査、地図、博物館の制度が相互に作用して国家のイメージ形成に寄与したと指摘している³。西川は博物館を国民統合の要素として分類しており、博物館は「文化の表象」という役割を果たすことから、「国民統合」と「文化統合」の双方の領域において国民形成を行っていく「装置」であるといえる⁴。

インドネシアは共和国の誕生の後に国民形成という中心的な課題に直面することになる。国民を形成する課題を解決する方法として発展途上国においては、政府は国旗、国歌などの国家シンボルや国語及び国の地理・歴史を中心とした国民教育制度の確立、学校教育の普及を含めた国民教育やナショナリズムの運動を通して、より強く人々のなかに「国民」を「イメージ」させ、促進し、定着させて行った。博物館という文化的「装置」もまたこうした国民形成の教育機能という重要な役割をもつ機関として重視されたのである。

インドネシアは、当時西欧列強のひとつであったオランダによりオランダ領東インドとして植民地化された。オランダによる植民地支配における博物学的思考が、政策や学術に反映し、植民地支配の正当性が博物館において表象される。インドネシア共和国の誕生はそのオランダによる植民地の領域を基盤として、その領土はそれを受け継いでいる。

これらの過程において、博物館が政府の意図の下で行われた展示を通じて国民形成にどのように関与してきたか、特にインドネシアを事例として分析する。博物館は公平で中立的なイメージを求められつつも、展示には一定の意図があり、その背後には国民教育の装置としての側面があるとされている。

本稿では、インドネシアにおける近代国民国家の形成の中で博物館がどのように位置づけられたのかという点を中心に考察する。博物館が国民形成のための重要な装置であったという点について

2 山影進 (1993) 「ナショナリズムと国民国家」『民族に関する基礎研究』総合研究開発機構, p. 74.

3 アンダーソン, 前掲書, p. 274.

4 西川長夫 (1995) 「日本型国民国家の形成」『幕末・明治期の国民国家形成と文化変容』新曜社, p. 11.

ナショナリズムとの関連で考察する。インドネシアにおける博物館の発展過程とその意味について、オランダ領東インドという植民地国家から独立後までの時代にかけて、検討を行う。

1. 西欧国家における帝国主義と博物学の確立

19世紀から20世紀にかけ、僅か一世紀の間で世界の構造が大きく変化した。この時代は「帝国主義の時代」であり、帝国主義国家によって世界は強者と弱者、「先進」と「後進」地域に分類された。帝国主義は植民地を軸として世界を支配・被支配に地域区分を行った。それは西欧を中心とした世界の一元化の時代でもあった⁵。

このような構図が形成されたのは、当時の封建制度や人口増加による土地不足、食糧難という問題を抱えた15世紀におけるヨーロッパ諸国が、航海技術の向上、天文学、地図製作などの専門分野の発達を背景に、その打開策として国外に新天地を求めた結果であった。大航海時代の到来はヨーロッパ社会に新たに情報と物の地球規模の流通、世界の「発見」をもたらした⁶。この世界「発見」というプロセスにおいて、世界規模の物や情報の流通を通じて様々な制度や概念が形成され、当時のヨーロッパの人々の認識する「世界」の相貌を大きく変化させていったのである⁷。

17世紀中頃には更に、それまで多様性と類似性を通してあらゆるものを解釈するという手法から、対象をカテゴリーの中に配列すること、すなわち多様性を同一性と相違性⁸に基づき秩序付ける「タブロー化」という新たな解釈手法が用いられるようになった⁹。こうした分類と配列が博物学的視線を生み出し、徐々に博物学的空間を西欧諸国全体に成立させていった。

植物園や動物園、そして「珍品陳列室」や「驚異の部屋」¹⁰とよばれる施設が次々と登場してきた。しかしこれらの施設は、元来、王侯貴族の間で流行していた邸宅内のコレクションであり、展示方法もまだ博物学的手法によるものではなく、多種多様な品を一同に寄せ集めた空間であり、個人の富と権力を象徴するものでしかなかった¹¹。

18世紀に入って、新しく獲得された非ヨーロッパの珍しい文物を知り、理解するための調査・学問が発達した。これは場合によって自然史、自然誌とされ、場合によって生物、地学、地理、考古学ともされた、自然界すべてを対象とする総合学である¹²。博物学は当時、先端総合的な学問とし

5 ホブスボーム、E.J. (1993)『帝国の時代1875-1914』野口建彦、野口照子(訳)、みすず書房、p.82.

6 吉見俊也(1992)『博覧会の政治学—まなざしの近代—』中央公論社、p. 6.

7 同上書、pp. 4-5.

8 同上書、p. 10.

9 フーコー、ミッシェル(1977)『監獄の誕生—監視と賞罰—』田村俣(訳)新潮社、p. 153.

10 収集された珍奇物が特別に設けた収納棚(Raritätenkabinet珍品収納棚)、あるいはそのための特別につくった一室(Raritätenkammer珍品陳列室)のなかなどに収納され、陳列された。同種の施設として、イタリアの「ステュディオオーロ(studiolo)」、ドイツ語圏内では「美術陳列室(Kunstkammer)」がある。吉田憲司(1999)『文化の「発見」』岩波書店、p. 12.

11 吉見俊也、前掲書、p. 17.

12 近藤和彦(1998)『文明の表象 英国』山川出版社、150頁.

てこの時代に生まれた。

この博物学は、学界だけでなく、王侯貴族から聖職者、知識人、ブルジョア、商人から一般庶民にいたるまで、社会の各階層の人々の間に浸透した¹³。博物学の確立によって、標本を体系的に分類し、保存するという博物学的手法が採用されるようになり、その規模も拡大していった。さらに、それぞれの施設が一般公開されるようになると、博物学的空間は一気にヨーロッパ社会全体に広まった。

こうして社会の中に博物学的空間が拡大するにつれて、その対象はモノや動物から人間へと広がっていく。実際にこの時代には「人間の博物学」¹⁴という新たな概念が生み出され、モノと動物以外に、人類をも分類し、序列化することが可能であるという意識がヨーロッパ社会に広がっていった。さらに、人間の「劣性」を「科学的」に証明する有効な手段として「野蛮」と「文明」という分類方法によって、二極対立の構図を生み出し、そのなかに優劣をつけていくようになる¹⁵。

15世紀から18世紀までの間に、西欧社会はそれまでの社会構造や社会的価値概念が大きく変容を遂げ、同時に新たな価値概念を発見していったのである。それは近代市民社会が確立し、国民国家という新しいシステムが誕生する中で、帝国主義イデオロギーとして広がっていった。この時代の帝国主義は政治的経済的な侵略だけでなく、西欧の価値観を普遍的価値として「世界を一元化」するという文化的侵略の過程でもあった。そのため、西欧という地域に限定された価値概念であったものが次々と普遍的価値概念として標準化されていった¹⁶。その結果として、西欧の人々の中に「白人」や「黒人」、「西洋人」や「東洋人」、さらに「〇〇民族」というカテゴリーを形成していく¹⁷。

こうして形成されたカテゴリーは、思考・行動様式を含めた「文化」と血のつながりや地域的共通性による「科学」や「歴史」を拠り所としてその「正当性」が主張された。ヨーロッパ諸国による帝国主義や植民地主義の思想は、サイードの指摘した「オリエンタリズム」に正当性を見出した、西欧の「知」による非西欧世界の「無知」に対する支配であった¹⁸。ヨーロッパ社会に形成されてきた「知」は、博物学的空間において効果をもっとも有効である「視覚」を活用し、自らの知の正当性を国民に証明する場を必要としたのである。

このような西欧の「知」による世界の解釈は、植民地主義・帝国主義による国家の政策と密接に関係し、それはその国家の政策（場合によって国家自体の存在）の正当性を広く国民に実証する場として博物館・博覧会という博物学的空間を生み出し、発展させていくことになる。

13 吉田憲司, 前掲書, pp. 13-17.

14 マーシャル, P.J., G.ウィリアムス, (1989)『野蛮の博物学誌—18世紀イギリスが見た世界』大久保桂子 (訳) 平凡社, p. 139.

15 吉見俊哉, 前掲書, p. 14.

16 松宮秀治 (2009)『ミュージアムの思想』白水社年, p. 11.

17 サイード, エドワード・W. (1997)『オリエンタリズム』平凡社, pp.121-123.

18 同上書, pp.2-6.

2. オランダ領東インドの誕生と博物館の設立

1795年、ナポレオン戦争における敗北によってオランダ（ネーデルラント）はフランス軍に占領され、一時期その支配下に置かれることとなった。この混乱の中、オランダ本国と植民地との交流は途絶え、1799年にはこれまでオランダ本国と植民地との貿易を一手に担っていたオランダ東インド会社（Vereenigde Oostindische通称VOC）が倒産した。イギリスはオランダ領植民地が敵国フランスに渡ることを恐れ、1811年にオランダ領東インドを占領した。

ナポレオン戦争が終わり、1815年に新王ウィレム1世のもとオランダの主権が回復すると東インド植民地はオランダに返還され、東インド会社を経由しない直接の植民地統治が開始された。

ウィレム1世は統治にあたって植民地の原住民の状況を始め動植物・鉱産物といった東インドの正確な状況を総合的に把握することを目指して、多数の画家・調査員・科学者などからなる調査団をジャワ島に派遣した。1820年代初頭、ライデンで国立自然史博物館と国立植物園が設立された。また、現地調査のため、1822年に植民地大臣および東インド総督の管轄下に自然誌委員会（Natuurkundige Commissie voor Nederlandsch-Indië）が設けられた¹⁹。委員の中心となったのは後のライデン大学附属植物園長であるプロイセン出身の植物学者C. G. C.ラインワルト（Caspar Georg Carl Reinwardt）や、同じくプロイセン出身で、のちにライデンの国立標本館長に就任した植物学者C. L. R.（Carl Ludwig Ritter von Blume）、H. クール（Heinrich Kuhl）、J. C. ファン・ハッセルト（Johan Coenraad van Hasselt）といった高名な科学者たちであった。彼らは総督府の管轄のもとで、植民地の探検と博物学的調査、自然物収集などに従事した²⁰。そのほかに、1778年に設立されたバタヴィア学術協会が1810年代に再び活性化され、1848年にライデン大学にジャワ語・ジャワ文化論が開設された。

1830年にオランダ人植物学者のJ. E. テイスマン（Johannes Elias Teijsmann）がバイテンゾルフ植物園の学芸員（実質的には植物園の責任者）として任命されると、さらに多くの植物生体が、バイテンゾルフへ輸送・移植された。1848年にはアブラヤシが西アフリカから移殖され、デンプン質で生産効率の高い南米原産のキャッサバが東インド全土に広められた。1852年から54年には南米からキニーネが導入された。また、3代目園長（1869-80）のシェファーはオーストラリアのユーカリ、タバコ、リベリアのコーヒーなどの台木を育成して種や接ぎ木を全土に配布した。このように、19世紀中盤になると、バイテンゾルフ植物園ではオランダ領東インドを越えてはるか南米、西アフリカ、オセアニアなどから採集された外来植物の移殖と繁殖が試みられたのである²¹。

このような時代背景から、ヨーロッパ本土では博物学熱が巻き起こり、外来の珍奇な動植物・鉱

19 Peter Boomgard, ed. (2013), *Empire and Science in the Making-Dutch Colonial Scholarship in Comparative Global Perspective 1760-1830*, Palgrave Macmillan, pp. 153-154.

20 芦崎瑞樹（2017）「19世紀オランダの植民地政策—植民地科学者としてのシーボルト」『パブリック・ヒストリー』14巻、西洋史学研究室大阪大学、p. 53.

21 同上書、p. 58.

物に対する注目が高まっていた。また同時に、自然誌委員会やバタヴィア学芸協会のもとで、オランダ領東インドの博物学研究が本格化していくこととなる。本国の科学者たちは植民地に赴いた科学者団と連携し、彼らの伝える新情報と珍奇な収集品に熱狂した。また、自然物のコレクション熱の結果、ヨーロッパ各地で王立・公立の博物館・植物園・動物園が設立された。これに触発され、オランダでもウィレム1世によって「王立珍品陳列室」が設置された。この施設は、「自然と文化に関する収集」を目的として1816年に創立されたものである。また、これらの珍奇な外来物品を収集することは国家の威信にもつながった。王立珍品陳列室はナポレオン戦争後の荒廃を経て新しく誕生したオランダ王国の国家的権威の象徴としても機能したのである²²。

1825年に、ジャワ島では、中央集権を目指すオランダ領東インド政庁とマタラム王国との間でジャワ戦争が勃発し、その闘いは激しさを増した。この戦争を遂行するための防衛費は膨れ上がり、ナポレオン戦争以降の負債を抱える巨大な額となって、オランダに重くのしかかった。この財政危機を乗り切るべく、オランダ本国は東インド植民地に対して、より大きな経済的利益を生み出すよう要求し始めたのである。これを機に、1820年代からウィレム1世が模索していた新しい植民地政策は、実行に移された²³。

1825年の議会への年頭演説でウィレム1世は東インド植民地のために発行された公債が1815年から10年でおよそ2倍になっていることについて触れ、植民地への「早急かつ直接的な介入」が必要であると宣言した²⁴。これ以降植民地財政を改善すること及び、植民地からより大きな利益をもたらすことを目指してオランダ本国による植民地政策が本格化した。

19世紀植民地支配を本格化的に強化するため、オランダは「合理主義的かつ先進的」西欧世界とは全く異なった、野蛮で遅れた「非合理的で神秘主義的」植民地世界の気候・土着宗教・伝統・慣習などに基づいた原住民の価値観をより詳細に検討し分析する必要性に迫られた。すでに宣教師によって、伝道と聖書翻訳のために、現地事情調査と言語研究や各言語の辞典編成が行われていた。また旅行記や地誌などが個別に現れていたが、政治的征服と植民地確立と並行して、オランダによる東インド諸島（場合によってアジア）研究が次第に制度化されていた。その結果、植民地政庁・総督府のもとで原住民調査を行うことになった。

1820年以降、東インド諸島における植民地領域の拡大とその政策の展開はオランダ人の東インド諸島に関する「知」的関心と熱意を深めた。その結果、さらなる探検・研究・研究成果の応用に対する社会的動きが生み出された。この知の漸進的な蓄積は、植民地支配組織に関わる足場の固定化を可能にした。

オランダは、オランダ領東インド植民地を効率よく支配するために、植民地に赴くオランダ官吏

22 栗原福也編 (2009) 『シーボルトの日本報告』 平凡社。

23 Peter Boomgard, ed., *Empire and Science*, p. 154.

24 Andreas Weber, (2012), *Hybrid Ambitions: Science, Governance, and Empire in the Career of Caspar G.C. Reinwardt (1773-1854)*, Leiden University Press, p. 191.

を養成する必要がある、またそのための原住民言語及び伝統的な慣習、宗教に関する知識の体系が必要不可欠となった²⁵。そのため、オランダは1851年に王立オランダ領インド言語地理民族学研究所 (KITLV-Koninklijk Instituut voor de Taal, Land en Volkenkunde van Nederlandsch-Indie) を創設した。当研究所は東単アジア諸地方の文献 (刊行書、未刊文書) を蒐集し、研究論集を発行し、隣接諸学会と関係すると共に、海外の研究者と交流を図ることを目的としていた²⁶。

研究所は以下のような形で、植民地に関する知を蓄積、共有した。

1. 学術誌 *Bijdragen tot de Taal, Land-en Volkenkunde van Nederlandsch-Indie* (BKI) の発行

研究所は1853年以来、この学術研究誌 (B.K.I) を発行している。初めはオランダ領インドを研究対象としていたので誌名にもそれを冠していた。収載論文の多いのは言語学、仏教学、次が歴史学等である²⁷。

2. 叢書 *Verhandelingen van het Koninklijk Instituut voor Taal, Land- en Volkenkunde* (V.K.I) の出版

研究所はまた紀要 *Verhandelingen* をモノグラフとして1938年から刊行し始めた。その内容は東インド群島地域を中心とした研究内容であった。具体的項目としては歴史、文学伝説、言語、法律慣習、民族誌、先史、地理、などである²⁸。

3. 慣習法集発行

オランダは東インド諸島を統治するに当たり、民族ごとに異なる多様な各地域の社会にある伝統的な価値体系、思考方法に関する理解が全く欠如していたことにより、多くの困難に直面してきた。またイスラーム法はヨーロッパ法理解とは全く異なる法概念であった。

そのため、民族や地域ごとにことなる慣習法とイスラーム法を研究し、その成果を原住民行政に適用する必要に迫られた。このような背景からC. ファン・フォレンホーフエン (C. van Vollenhoven) によって、東インド領域における慣習法の研究が誕生した。彼の成果を基盤として数多くの彼の弟子たちより、その後30年にわたる調査、資料蒐集、体系化が行われ、ライデン学派が成立することとなったのである。オランダは東インド社会の慣習法の研究を重視したが、それは当然の結果として「秩序」に関する概念の発見と結びついた²⁹。

4. 図書館・博物館の設立

研究所は購入、寄贈、交換等によって多数の関係図書を収蔵しており、1868年以降は東インド協会 (*Indisch Genootschap*, 1854年に政治、経済方面に主力をそそぐ姉妹団体としてハーグに設立) の図書をも併せて、東アジアを中心とする豊富な図書を収蔵した³⁰。

25 デ・ヨセリン, P.E.他 (著) (1987) 『オランダ構造人類学』宮崎恒二、遠藤史、郷太郎 (訳) せりか書房, p. 482.

26 中村孝志 (1964) 「オランダの東南アジア研究」、『東南アジア研究』、京都大学、2巻1号、p. 95.

27 同上書、p. 95.

28 同上書、p. 96.

29 デ・ヨセリン, P.E.、前掲書、pp. 468-488.

30 中村孝志、前掲書、p. 106.

博物館に関しては、いくつかの小規模な公共民族学的コレクションに加えて、オランダには2つの主要な博物館、つまり植民地博物館と民族学博物館があり、1880年代初頭にオランダの民衆に向けて植民地をはじめとした非ヨーロッパ世界のイメージを造り始めた。1837年に学者への援助として最初に出発したライデン国立民族学博物館はフィリップ・フォン・シボルトのコレクションを基盤に設立された。リンドン・セルリエル (Lindon Serrurier, 1846-1901) が監督として就任した1881年に、彼は博物館の人類学および民族学的コレクションを拡大しようとした。1864年に産業振興協会によって設立されたハールレム植民地博物館は、主に起業家向けの博物館であった。

1873年に設立された地理学協会 (Koninklijk Nederlandsch Aardrijkskundig Genootschap) は、植民地拡大と知の追求との間の相互作用の最も雄弁な例であるかもしれない。この協会は、植民地についての情報を広げるだけでなく、オランダ全体でこの情報の実用普及をさせることに専念していた。また、その活動は、東インド諸島におけるオランダの進出の拡大を奨励し、促進することであった。1888年に「王立」という称号を与えられ、王立地理学協会の創設者とそのメンバーは、民間人、文化人、財界の人、商社の社員、軍人、行政のエリートの混合であった。議長を務めた東洋学者であるP.J.ヴェス (P.J. Veth, 1814-1895) の下に、1877~1889年にかけてスマトラへの研究探検隊を形成し、遠征を行った。これは1860年代に発見された西スマトラにあるウンピリン炭田の輸送ルートを発見するためのほか、軍事的・政治的な遠征でもあった³¹。

このような研究・教育機関と研究者の制度化によって、東インド諸島だけでなく東南アジアまでに拡大した研究範囲に関する学問的成果が蓄積され、継承され、ジャワ学、東インド学などオランダが世界に誇る学問的研究が築かれていったのである。東インドの古代史、古代文化、古代学など、古典研究を中心となり、それはこの地域の未知の領域であり、また、遺跡の発見と発掘、数多くの碑文の解読を通して、植民地の過去の栄光が発見されることを意味した³²。

以上のオランダの「知」によるオランダ領インド諸島の認識を体系的に収集・展示する場として、オランダ植民地政庁は様々な博物館を建設した。オランダ領東インドで設立された博物館において、種類別から分類すると以下の通りである。

①総合博物館

バタヴィア王立学術協会 (Koninklijk Bataviaasch Genootschap van Kunsten en Wetenschappen) はVOC時代の以後の「VOCの経済活動の発展に資するすべての情報の蒐集」を目的として1778年4月に設立された。1810年代に入り、この協会の活動は新たな局面に入り、政庁の後援をえて広く学術活動の各領域、とくに従来の自然科学関係の分野 (土地、植生、資源、水利等) に加えて、人文社会分野を扱うようになった。1843年以降は、インドネシア諸地域の考古学、歴史、言語、地理、文化についての史料と情報が精力的に蒐集され整理されるようになり、考古学と民

31 Vaart, Rob Van Der. Pater, Ben De. Oost, Katie. „*Geography in The Netherlands*”, *Belgeo*, 1, 2004. pp. 45<<http://belgeo.revues.org/10076>> (参照: 2023年10月12日)

32 土屋健治 (1994) 『インドネシア—思想の系譜』 経書書房, pp. 69-70.

族学の資料を所蔵するためのバタヴィア学術協会博物館 (Museum van Het Bataviaasch Genootschap van Kunsten en Wetenschappen、今日の国立博物館の前身) が、バタヴィア中心部に開設された。

②ジャワ文化博物館

オランダ植民地政庁は、ジャワを中心とするインドネシア各地の古伝承本を含む蒐集品を保存、研究、および紹介することを目的として、ラディヤ・プスタカ博物館 (Museum Radya Pustaka)、プロ・マンクヌガラン博物館 (Museum Pura Mangkunegaran)、ソノブドヨ博物館 (Museum Sanabudaya) を設立した。

そのなか、ジャワ研究所 (Java Instituut)³³により設立されたソノブドヨ博物館 (Museum Sanabudaya) は最も重要な博物館であり、ジャワ島だけでなく、バリ島、ロンボク島、マドゥラ島などジャワ周辺の民族や地域からのものを収集・展示・研究を活発的に行った。

③歴史博物館

スラバヤ市立歴史博物館 (Stedelijk Historisch Museum Soerabaia) はドイツ生まれのスラバヤ市民であるゴッドフリード・ハリオヴァルト・フォンファーベルによって1933年に設立された。博物館は、スラバヤの市庁舎に開設され、1937年7月25日に植民地政府によって正式に開館した。その後、博物館の建物が転々と移転した後、植民地政府は展示室、図書館、博物館の事務所、講堂を整備するために博物館を拡張した³⁴。

そのほかに、旧バタヴィア博物館 (Oud Batavia Museum) はバタヴィア (現在のジャカルタ) の建設とその発展についての歴史博物館として建てられた³⁵。この博物館は1937年から準備され、1939年に開館した。

33 ジャワ研究所 (Java Instituut) は、1919年12月17日オランダ植民地政庁により、ジャワ島、バリ島、マドゥラ島の民族・地方文化を発展させるという目的を掲げて設立された。本研究所は、文化会議や展示会の開催、言語会議、雑誌の発行、美術工芸学校 (Kunst Ambachtsschool) の設立、論文コンペ、調査・研究活動、文化施設や美術館の設立などさまざまな活動を行っていた。当初、ジャワ研究所は、バタヴィア (現ジャカルタ) に事務局を置いたが、1931年にスラカルタ市に移転し、1934年11月以降、事務局はジャワ文化世界の中心地であるジョグジャカルタに移転した。

34 独立後、インドネシア国立教育文化省に博物館局が設置された後、政府は本博物館に関する調査を本格化し、1972年5月23日、博物館はMuseum Jawa Timur (東ジャワ博物館) と新名を付けた。1974年11月1日、東ジャワ州立博物館として開館した。マジヤバヒト時代の14世紀のジャワの詩人にちなんで、州立博物館として「タントゥラル」と名付けられた。

35 現在のジャカルタ歴史博物館は、オランダ領東インドの総督ジョアン・バン・ホールン (Joan van Hoorn) によって建設された。アムステルダム宮殿を模した建築様式で、本館のほか東西に別の2棟もあり、地下牢や刑務所も併設していた。かつてオランダ東インド会社の行政本部もここにあった。ジャカルタ歴史博物館には、旧バタヴィア (コタ地区) の歴史の詳細を収集・展示目的で設立され、1939年 (昭和14年) に「ウードバタヴィア博物館 (Museum Oud Batavia)」として一般公開された。およそ37のギャラリーでは、23,000点を超える展示品を陳列している。

④自然博物館

オランダ領東インドの自然と資源の豊かさも植民地の権力を示す手法に利用された。そのために、地質学博物館、動物学博物館、発掘した考古学物のための博物館、植物園など開設された。

1817年にバイテンゾルフ国立植物園 ('s Lands Plantentuin te Buitenzorg)³⁶がジャワ島に建設された。植民地時代は外部への展示活動よりも調査・研究を中心として経済的に有用な熱帯植物やその種子の収集に力が入られた。

バイテンゾルフ国立植物園はバタヴィアの南約60kmの都市バイテンゾルフ(現在のボゴール)に位置している。現在でも熱帯・亜熱帯の世界各地の有用植物が栽培されている世界最大級の植物園である。植民地時代は外部への展示活動よりも調査・研究を中心として経済的に有用な熱帯植物やその種子の収集に力が入られた。初代園長ラインワルトは東インド全域から900種余りの植物をこの植物園に収集した。彼がオランダ本国に帰国すると、C.L.ブルメが2代目園長となった。植物園で気候馴化された植物は、園内で研究の対象になるものもあったが、多くの植物生体はライデン大学附属植物園へ、植物標本は国立標本館へ移送された³⁷。

地質および鉱物資源の調査のためにオランダ植民地政庁は1850年に採鉱業局(Dienst van het Mijnwezen、1922年にDienst van het Mijnbouwと改称)を設立した。1928年に、これまで採取し、研究した岩石の試料、化石、鉱物、地図などを保存保管するための地質学博物館(Geology Museum)がバンドンで建設された³⁸。

⑤民族博物館

オランダ植民地政庁はアチェ、シマルングンやブキッティングなどスマトラ島各地のほか、バリ島、カリマンタン島、などオランダ領東インドの多様な民族に関する民族学の資料を所蔵・研究するため、各地に民族博物館を建設した³⁹。

植民地主義から生まれた、これら博物館は独立後のインドネシアにおいて、ほぼそのままの形で、新たな役割を担うこととなる。

3. インドネシア共和国の誕生と博物館の役割

(1) スカルノ政権時代の博物館政策とその特徴

インドネシアは第二次世界大戦中の日本軍占領を経て、1945年8月17日にインドネシア共和国の

36 バイテンゾルフ(現在のボゴール)は、標高260m、年平均降水量3000~4000mm、湿度80~90%の湿潤なゆるい雨季と乾季をもつ熱帯モンスーン気候であり、植物の馴化・養殖にふさわしい土地であった。植物園の設計はイギリス占領期の総督であったラッフルズの発案を原型として考案され、自然誌委員会会長ラインワルトが初代園長となった。

37 芦崎瑞樹, 前掲書, p. 57.

38 Munandar, Agus Aris, et.al (2011), *Sejarah Permuseuman Indonesia*, Direktorat Permuseuman Dirjen Sejarah dan Purbakala, p. 22.

39 同上書, pp. 19-25.

独立を宣言し、対オランダ独立戦争を経て、1949年末にはオランダから正式に主権を譲渡された。民族独立運動の結果として、オランダ領東インドという植民地国家を継続する形で独立を達成したのである。政治的独立を果たしたインドネシアは、国民国家という西欧近代的価値に基づいて、その内実たる国民統合という課題に取り組むこととなる。

しかし、植民地領域としてのインドネシアは、帝国主義諸国相互の政治的・軍事的力関係によって決定された。その結果、地域固有の文化的同一性や歴史的体験の共同性とは無関係に、現在のインドネシアという国家が形成された。その上、長い間の過酷な植民地支配の下にあったインドネシアは、歴史形成のなかで、内発的・自立的な国家形成に関する力を奪われてしまったため、社会的文化的統合への自然な発展を妨げられたのである。

これらの理由で、インドネシアにおいて多様な民族から構成される一つの国民を形成することが最大の政治課題となった。そのため、広大な群島国家特有の分裂状態にあった民族や文化を一つに統合し、一つの国民を創出することによって、近代的な国民国家を形成する問題は独立を達成したインドネシアにとって最大の政治的課題となった。

独立国家の誕生に情熱を注いだ初代大統領のスカルノを中心とした指導者たちは、早い段階から、インドネシアが抱えるこれらの課題を理解していた。そのため、彼は強力な政治的指導力を発揮して、インドネシア各地域の多様な民族文化の要素をナショナリズムの枠組の中に再編しようとしたのである。その課題を克服するために、スカルノは古来受け継がれた文化の偉大さを見出そうともし、国家建設プロジェクトとしてインドネシアの近代性を示すために、壮大な大通り、記念碑、公共の建物を建設することによって首都ジャカルタをインドネシアのシンボルとして建設しもした⁴⁰。

この点はスカルノ体制が示していた特徴から理解できる。スカルノ体制の最も強い特徴は、国家の政策や計画の実質的な中身よりも、華麗さ、持続する熱狂の感情、示威的行事や国家的偉大さの象徴の強調することによって広大な島々に広がる多数の庶民たちに国家誕生に興奮する感情を持続させ続けていくことにねらいがあった⁴¹。

行政の中心であり、以前はバタビアという植民地の首都であったジャカルタは、新しく独立した共和国の中心であり、そのためジャカルタにはバタヴィアとは異なった、新しく誕生した国民の誇りとなる国家的シンボルの建物が必要であった。このような首都にスカルノは見栄えのする公共建築物を建てた。国家プロジェクトの下で、記念碑や像も含めて、インドネシアの開発進歩を展示するためのポーラビルディング (Gedung Pola)、日本企業が設計・建設したサリナ百貨店 (Toserba Sarinah)、貿易と観光センターとして建設されたウスマ・ヌサンタラ (Wisma Nusantara)、アメリカの建築家アベル・ソレンセン (Abel Sorensen) が設計したインドネシア・ホテル (Hotel Indonesia)、イスティクラル・モスク (Masjid Istiqlal)、国会議事堂 (Gedung MPR/DPR RI)、インドネシア中央銀行本店 (Gedung Bank Indonesia) など多くのモダンな建物や、独立記念塔

40 レッグ、ジョンD (著) (1984) 『インドネシア歴史と現在』 中村光男 (訳) サイマル出版会, p. 260

41 同上書, p. 259.

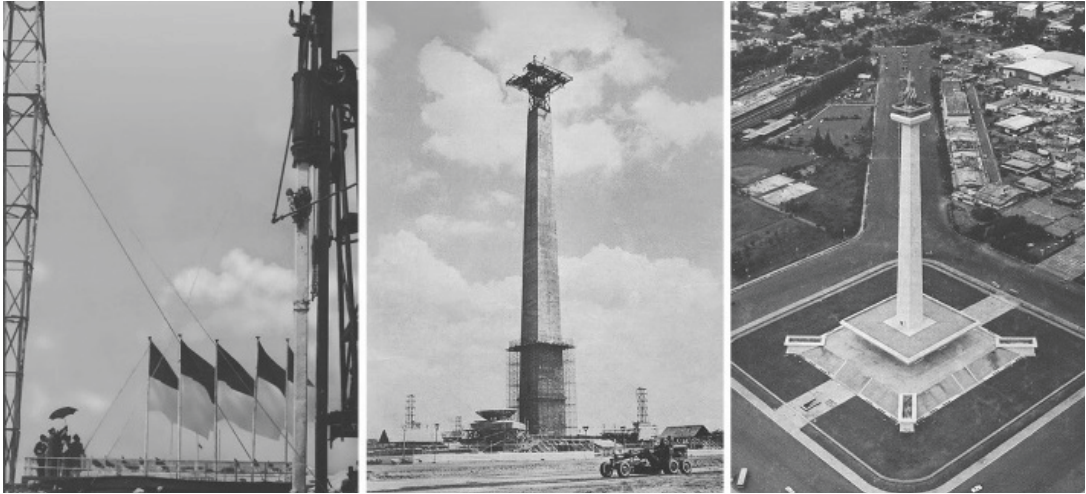


図1 「ナショナル・モニュメント (国家記念碑)」の建設と完成様子。

(出典：Dinas Tata Bangunan dan Pemugaran DKI (1978),

Tugu Nasional: Laporan Pembangunan, Pelaksana Pembina Tugu Nasional)

(Monumen Nasional)⁴²、英雄の像 (Patung Pahlawan)⁴³、歓迎の塔 (Monumen Selamat Datang)、航空モニュメント (Monumen Dirgantara) など象徴的な記念碑や像を建設した⁴⁴。

これらによってスカルノは新しく誕生した権力の象徴としてインドネシア首都ジャカルタを「演出するステージ」⁴⁵に変貌させ、そこに国民にとって中心的な空間として作り出そうとしていた。ジャカルタに建てられたいくつかのシンボリックなモニュメントや像や建物のほかに、考古学遺跡が注目され、独立後のインドネシアの地位を高める手段として有効に利用された。1950年代に入って、カンボジア王ノロドム・シハヌークはボロブドゥール周辺で飛行機ツアーを行い、フィリピンのエルピディオ・クイリノ大統領、ビルマのウー・ヌ首相、当時米副大統領リチャード・ニクソン、ジャワハラル・ネルなど世界の数々の著名な政治指導者が中部ジャワにあるボロブドゥールや

42 独立記念塔 (Monumen Nasional) はジャワ・ヒンドゥーのリンガ (男性の象徴) とヨニ (女性の象徴) を形どった全長132メートルの塔である。空にそびえ立つ塔が男性、それを受ける台座が女性、この二つの結合は調和のとれた豊穡と統一を示している。その他、白と杵という意味もありインドネシアの伝統と文化を表現している。台座の地下部分は歴史博物館となっており、先史時代から王朝時代、オランダの植民地支配、日本の軍政、独立など、インドネシアの歴史をジオラマパネルで学べるようになっている。台座部分の「独立の間 (Ruang Kemerdekaan)」には、現在のインドネシアの出発点ともいえるスカルノ初代大統領による「独立宣言文」が収められている。

43 ジャカルタ中心部のメンテン地区に設置されたこの像は、インドネシア共和国政府への贈り物として、マトヴェイ・マニザー (Matvei Manizer) とオットー・マニザー (Otto Manizer) という有名な旧ソ連の彫刻家によって制作された。多くの人はこの像を「農夫の像」と名付け、この名称で知られている。

44 Dinas Museum dan Sejarah DKI Jakarta (1993), *Monumen dan Patung di Jakarta*, Dinas Museum dan Sejarah DKI Jakarta.

45 Ardhiati, Yuke. (2013), *Bung Karno dalam 'Panggung Indonesia'*, PT. Wastu Adicitta Jakarta, pp. 7-9.



図2 (左) 1962年に完成した「Selamat Datang (ようこそ)」モニュメント。(右) 現在の景色。
(出典：Katalog (2010), *Pameran Edhie Soenarso "Monumen"*, Salihara, pp. 24-25)

プランバナンというヒンドゥ・仏教寺院⁴⁶の古代遺跡を訪問した⁴⁷。独立以降、考古学遺跡が国家遺産化され、インドネシア国民の先祖の偉大さとその業績が持て、海外へのアピールの重要性が強く意識された。

インドネシアの指導者たちにとっては、独立後インドネシアのアイデンティティを獲得するために、政治的、文化的、外交的に、考古学遺跡は明かに最適な手段であると考えた。こうしてスカルノ政権時代にインドネシアの指導者たちは、インドネシアの近代性を強調しながら、古来の「伝統文化」の発見と陳列を行った。「上からのナショナリズム」において、博覧会、あるいはそれに代表される博物学的空間は、国民という枠組みを埋める内実を生み出す装置として機能したのである。

(2) スハルト政権時代の博物館政策とその特徴

独立後、スカルノの政策とその思想は、スハルト体制においても維持された。しかし、1970年以降のスハルト政権の開発経済優先政策による権威主義的かつ独裁的な文化的イデオロギーの進展は、博物館・博覧会にも強く反映した。この時期に入って、国家の統一と国民統合を目指すさまざまな政策が優先的に実施された。数多くの文化施設が作られ、スハルト体制下ではスカルノ以上に「記念碑主義」が重視され⁴⁸、モニュメントや彫像が全国各地に建設された。

スハルト時代のモニュメントは以下のような特徴を持っている。まず、第一に、これらのモニュメントのテーマは1945年の独立宣言、それに続く独立戦争での軍の役割、および1965年以降の「新

46 両寺院は8 - 9世紀頃に建てられ、1991年に世界文化遺産として登録された。

47 Dinas Purbakala (1958), *Laporan Tahunan Dinas Purbakala 1951-52*, Dinas Purbakala (1962), *Laporan Tahunan Dinas Purbakala 1954*, p. 24.

48 Anderson, Benedict., (1973), *Notes on contemporary Indonesian political communication*. Indonesia, vol. 16, p. 61.



図3 ジャカルタにあるMonumen Pancasila Sakti (神聖なパンチャシラモニュメント)。同様なモニュメントは大小規模で全国各地に建設された。

(出典：Kompas.com, *Monumen Pancasila Sakti, Mengenang Perjuangan Pahlawan Revolusi*,
《<https://travel.kompas.com/read/2023/09/15/090900027/-monumen-pancasila-sakti-menang-perjuangan-pahlawan-revolusi>》 (参照日：2024年1月7日))

体制」の建設に対する軍の貢献にほぼ限定されている。つまり、これらのモニュメントはインドネシアにおける軍の奉仕と寄与が具現化されている。

この傾向に合わせて、ジャカルタだけでなく、インドネシア各地に軍事博物館が開設され、独立戦争と「九月三〇日事件」⁴⁹が主題となり、関連資料が展示されたりパノラマが作成されたりしていた。そこでは、軍の奉仕と共産党の裏切りが二重のテーマとして繰り返されていた。第二に、これらのモニュメントの形式が挙げられる。これらのモニュメントはほぼ例外なく、実物と同じ大きさであり、または歴史の事実に即した作品として建設されている。このようなスタイルは、各モニュメントを共通の特性で結びつけ、例えば、独立戦争時の特定の場面が正確に再現されることを意味する。まるでアルバムの写真が立体化され、過去が再現されるかのようなものである⁵⁰。このように、モニュメントは建造物以上のものであり、インドネシアの歴史の三次元的な表現であり、歴史の「事実」を伝える教材となっている。これらのモニュメントは、軍事博物館と共に学生たちの学習の場としてしばしば活用されている。

スハルトは大統領主任直後の1969年から1998年までの30年間にわたる権威主義的体制の時代に各地に大小博物館が次々と開設すると同時に大小数多くの博覧会が独立記念や国家的祝日に全国で開催された。インドネシアにおける博物館の開発の目的は、文化遺産と自然遺産の保護・保存し、そ

49 1965年9月30日、インドネシアのスカルノ大統領の統治下で、共産党系軍人によって6人の軍幹部が殺害され、これを受けて軍を率いたスハルト将軍が反乱を抑え、共産党を弾圧した。共産党の支持を受けていたスカルノ大統領は徐々に権力を失い、1966年3月11日にはスハルトによって大統領権限を剥奪された。この間、数十万の共産党員や協力者が虐殺されたと言われる。九月三〇日事件は軍隊内部の左派と右派の衝突であるが、その措置をめぐってスカルノ大統領とスハルト将軍の権力闘争へと展開し、インドネシアの独立後のスカルノ政権からスハルト政権への移行をもたらす重要な出来事であった。

50 土屋健治 (1994)「インドネシアにおけるナショナリズムの現在」『日本政治學會年報政治學』年45巻、p.127.

れに、自然環境や特有な文化など州地方の文化的特徴を国民に紹介することにある⁵¹。

3. タマン・ミニ・インドネシア・インダーの建設とその意味

スハルト時代に建設された博物館施設のなかで最も代表的な存在は、「タマン・ミニ・インドネシア・インダー」（美しいインドネシアのミニチュア公園－Taman Mini Indonesia Indah）と呼ばれるジャカルタ郊外に開設された広大な博物館の複合施設である。スハルト大統領と妻ティン・スハルトの要請により、タマン・ミニはインドネシア共和国国民の民族的多様性を表現し、パンチャシラ（Pancasila）と呼ばれる建国五原則、ビネカ・トゥンガル・イカ（Bhinneka Tunggal Ika、多様性のなかの統一）という国家理念を表象する舞台となるように設計された⁵²。

この国家的プロジェクトは来園するインドネシア人の、自国への誇りと、国民意識を高めることを目的としていた。スハルト大統領が述べたように、古代ジャワのマジャパヒト王国や仏教王国として栄えたスリウィジャヤ王国といった東南アジアを代表する古代王国は、記録はあっても、それを視覚的に理解できる遺跡が少なかったため、インドネシア国民の意識と自国への誇りを高めるために新しい施設が必要とされた⁵³。タマン・ミニの公式ガイドに外国人観光客の増加という目的が述べられてはいる⁵⁴が、タマン・ミニの設立で意図された来園者は、外国人観光客ではなく、むしろインドネシア国民そのものであった⁵⁵。スハルトは、世界最大の多民族で構成されたインドネシア国家の姿をタマン・ミニと呼ばれる多民族文化博覧会施設を通して、まだ統合過程にあるインドネシア国民に対して「多様性の中の統一」（ビネカ・トゥンガル・イカ）というインドネシアの国家的課題を理解させるための国民的教育施設として設立したのである⁵⁶。

タマン・ミニは公園ではあるが、インドネシアの国家の基盤となる各民族の文化と伝統をミニチュアのかたちで展示する博物館であり、芸術・慣習や伝統・生活規範などの豊かさ、生活環境、二つとない自然の美しさの概要を提供する博物館である。なかにはインドネシアの各民族における伝統的な建築様式で再現されたパヴィリオンがあり、生活用具や衣装・工芸品の展示、舞踊や演劇など芸能の上演が毎日行われ、頻繁にパレードや映像をとおして、繰り返し呈示される。またインドネシア各地の伝統文化がさまざまな形態で紹介、保存、育成されるための教育の場でもある。

タマン・ミニは、インドネシアの各民族の家族、子供から大人までの来場者⁵⁷に国家の過去の栄

51 Direktorat Permuseuman (1999), *Perkembangan Permuseuman di Indonesia dari Pelita I - VI* 52 パンチャシラとビネカ・トゥンガル・イカについて、戸津正勝「インドネシア共和国憲法とパンチャシラ（建国五原則）」『国士館大学教養論集』、第18、1984年。

53 Sekretariat Negara, *Pidato Presiden pada Pembukaan Rumah Sakit Pertamina Tanggal 6 Januari 1972*.

54 Yayasan Harapan Kita (1975), *Apa dan Siapa Indonesia Indah*. Yayasan Harapan Kita Jakarta, p. 13.

55 Picard, M. and Wood R. E. (eds) (1997), *Tourism, Ethnicity and the State in Asian and Pacific Societies*. Honolulu: University of Hawaii Press, p. 10.

56 同上書, p. 20.

57 2007年から毎年およそ400万～500万人の来場者がタマン・ミニを訪れ、2012年がピークとなり、およそ789万人の来場者が記録された。Badan Pusat Statistik Provinsi Jakarta, *Jumlah Kunjungan Wisatawan ke Obyek Wisata Unggulan Menurut Lokasi di DKI Jakarta 2007-2022* <<https://jakarta.bps.go.id/indicator/16/777/2/jumlah-kunjungan-wisatawan-ke-obyek-wisata-unggulan-menurut-lokasi-di-dki-jakarta.html>>（参照：2024年1月8日）

光と未来への可能性を見せることで、彼らがインドネシア民族として、また国民としての誇りを持つようになることを目的としていた。タマン・ミニは、国家のさまざまな局面を提示する、インドネシアの文化的伝承と交流の重要な証拠⁵⁸の展示場であった。ティン・スハルトは「これからの世代のための貴重な遺産」と「それらがすべて消えてしまう前に、それらを理解する世代がいなくなる前に、ますます努力が必要になっている。」⁵⁹と述べていた。これらの博物館の外見は、ヨーロッパのものに非常に似ている⁶⁰が、その根底にある哲学は大きく異なっていた⁶¹。

園の中央には大きな人工池が造られ、インドネシアの主要な島々をかたどった土盛りが配置されている。あたかも海に浮かぶ群島を眺めるかのように、国土の形態や相対的な規模の大小、位置関係を知ることができる。池の周囲は区画され、全33州の代表的な家屋が穀倉や副棟などと合わせて建つ⁶²。



南スマトラ州



ナンゲル・アチェ州



南スラウェシ州



ジョグジャカルタ特別州



バリ州



東カリマンタン州

図4 州ごとの伝統民家 (Rumah Adat) の復元とするパヴィリオンの一部。パヴィリオンにおいて生活用具、民具、衣装などの展示や伝統芸能の上演を行い、婚礼儀式などを再現する。全て33州のパヴィリオンが設置している。(出典：TMIIの公式サイト《https://tamanmini.com/taman_jelajah_indonesia/en/anjungan/》(参照日：2024年1月10日))

58 Pemberton, J. (1994), *Recollections from 'Beautiful Indonesia' (Somewhere Beyond the Postmodern)*. Public Culture, vol. 6, p. 255.

59 Yayasan Harapan Kita (1975), 前掲書, p. 13.

60 野外博物館として国民の形成と密接に関連し、そして世界的に影響を持つ一つの博物館は、ストックホルム近くにあるスカンセン野外博物館 (1891年10月11日に開館) である。日常生活や郷土文化など民俗文化を展示する野外博物館は、例えば、オランダ野外博物館 (アーネム) で1911年に、ラトビア野外民俗博物館 (リガ) で1924年に、セント・ファガズ国立歴史博物館 (ウェールズ) で1949年に、アルスター博物館 (ベルファスト、北アイランド) で1958年に開設された。Hendry, J., (2000), *The Orient Strikes Back*. Oxford: Berg.

61 Hitchcock, Michael. (2005) "We Will Know Our Nation Better": *Taman Mini and Nation Building in Indonesia*, Civilization, Vol. LII, no. 2, p. 50.

62 建設当時27州のパヴィリオンが建設されたが、地方分権化による州の増加により、現在33州のパヴィリオンに増設した。

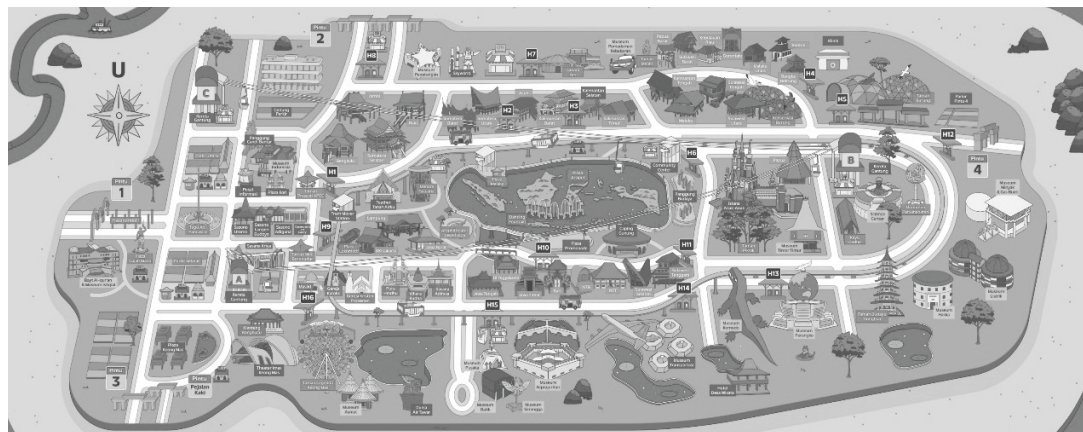


図5 現在タマン・ミニ・インドネシア・インダーの展示物や施設の地図

(出典：TMII公式ホームページ<https://tamanmini.com/taman_jelajah_indonesia/wp-content/uploads/2023/08/newTMIIIMAP.jpg> (参照日：2024年1月7日))

これらの伝統家屋を模したパヴィリオンの外装は過剰なまでに復元されて、壮麗さを競い合う。内部では生活用具や民俗衣装などの展示、民芸品の販売がある。前庭でも結婚式の再現や民俗芸能が上演される⁶³。したがって、個々のパヴィリオンそれ自体がまた地方文化の博覧会的な機能を備えている。多数の象徴の集積であるタマン・ミニは、「想像の共同体」としてのインドネシア国民を、公共的な空間に具象的、視覚的に描き出す巨大な装置であり、インドネシアの国家と国民についての見取り図なのである。

後に追加された施設として「インドネシア兵士博物館 (Museum Keprajuritan Indonesia)」と「科学技術センター (Museum Pusat Peragaan Ilmu Pengetahuan dan Teknologi)」がある。この博物館は「インドネシア国軍の役割と歴史」を展示するもので、7～19世紀に群島各地で起こった戦いから14のジオラマが「抜きんでた愛国精神」との理由で選ばれ、現在行政州のうちの14州における戦いという位置づけでジオラマ化されている。この博物館は、独立闘争 (1945～1949年) にちなんだ国内各地の地方博物館や歴史資料館とは決定的に異なり、既存のものを統合するという。建物そのものは五角形で、パンチャシラ「国家建国5原則」のシンボルになっている⁶⁴。

タマン・ミニはインドネシアのさまざまな文化伝統を展示するという点が強調されるのでしばしば見過ごされがちであるが、それとは相反するようなテーマをもつ施設もある。たとえば上記の「科学センター」は、設立の趣旨によれば、青少年が基礎的、応用的な科学技術に直接に触れ、関心を高め、

63 TMII (2012), *Taman Mini "Indonesia Indah"-Pesona Indonesia*. TMII

64 タマン・ミニの敷地内に地方民族博物館以外に、インドネシア博物館、スポーツ博物館、切手博物館、インドネシア博物館、インドネシア兵士博物館、広報博物館、コモドと昆虫類博物館、蝶々と昆虫博物館、コーランとイスティクラル博物館、客家 (インドネシアの華人) 博物館など様々なテーマの博物館がある。

現在と将来の社会的な役割を理解することをめざすという。これに「石油天然ガス博物館 (Museum Minyak dan Gas Bumi)」「テレコミュニケーション博物館 (Museum Telekomunikasi)⁶⁵」「輸送博物館 (Museum Transportasi)⁶⁶」を加えてみると、科学技術への関心を促そうとしているのか、それとも「新秩序体制」の最優先課題、「開発」の方向の正しさを象徴するかのようである。

さまざまな展示物や施設、舞踊や演劇などパフォーマンス、あるいはまた科学技術の進歩発達を見せる博覧会にしても、インドネシアの生活や自然、「開発」の目的やその成果についての象徴的な表示であった。さまざまな象徴を組み合わせ用いて、ある地理的な「自画像」をイメージさせるという手法は、現実の写像 (mapping) を提示するという点でまさに地図による表現と同質である考えられる。

おわりに

オランダ領東インドでは、博物館は植民地支配の成果と実績、そして植民地国家の成立の成功を誇示するものであり、オランダによる植民地の正統性を証明する場として役割を果たした。植民地における博物館は、植民地各地の諸民族、伝統や文化、産品を、オランダ領東インドに属するものとして、分類し、系統立て、並列して展示した。オランダの意図は、西洋文明の福祉と安寧を「与える」側と「与えられる」側の対比であり、常に前者の優越性、強大さを強調し、後者への支配を正当化するものであった。裏返せば、オランダは原住民の文化の後進性を強調したのである。

インドネシア共和国の政治的独立が実った後も、新たな国民国家の内実はまだまだ雑多、多様であり、国民が統合された状態からは程遠かった。スカルノとスハルトはそれぞれ異なるアプローチを取ったが、いずれも博物館的空間を活用した点では一致していた。国民国家に内実を与えようとしたスカルノは、インドネシア国民の偉大さを示すモニュメントを建設し、国民に提示した。また、インドネシアの古い歴史を掘り起こし、それぞれの遺跡を、その当時には存在しなかった「インドネシア国民」の基盤となった諸民族が昔から偉大であったことを示すモニュメントに転用していった。スカルノは、近代的なものであれ、古代の遺跡であれ、それをインドネシア国民の偉大さを示すものとして活用した。

スハルト政権下において、1970年以降の開発経済優先政策が博物館や博覧会に反映され、権威主義的で独裁的な文化的イデオロギーが進展した。スハルト時代のモニュメントは、軍の奉仕と独立戦争に焦点を当て、ジャカルタや各地に軍事博物館が開設された。これらのモニュメントは独立戦争の特定の場面が再現され、歴史の事実を伝える教材となっている。スハルトは30年間にわたり、大小の博物館と博覧会を開催し、文化遺産や自然遺産の保護・保存とともに、国内の文化的特徴を国民に紹介する目的で博物館の開発を進めた。

65 2021年に閉館し、2022年に政府によるタマン・ミニの大規模な改造により廃館となった。現在は「プラザ・ガジャマダ (Plaza Gajahmada)」という広場になった。

66 TMII, 同上書, pp. 333-372.

スハルト時代に建設されたタマン・ミニでは、インドネシアの各民族やその文化が、行政区画(州)ごとに分類され、展示される。これによって、インドネシアの各州、そしてその州にいる民族が「インドネシア」という枠組みに属しており、かつ並列して存在していることを視覚化したのだ。このような博物学的手法は、タマン・ミニが娯楽施設であると同時に、国民形成を促すための政治的教育機関としての博物館であることを示している。

タマン・ミニのような文化的施設は博物館兼テーマパークに似ており、博物学とナショナリズムが結びついたヨーロッパの野外博物館とも共通している。タマン・ミニにおいて、本来それぞれ個別に存在していた諸民族の文化は、国民国家という枠組みの中に位置付けられ、「伝統的」「民族的」「地方文化」として表象され、国民文化の一部に再編成されていく⁶⁷。しかも、その再編成は、インドネシアの各民族の文化が、その文化とは本来的には関係のない行政区画(州)という枠組みに沿って分類され、系列化され、提示されるのである。

参考文献

- 芦崎瑞樹(2017)「19世紀オランダの植民地政策—植民地科学者としてのシーボルト」『パブリック・ヒストリー』14巻、西洋史学研究室大阪大学、pp.51-69.
- アンダーソン、ベネディクト(著)(2008)『定本 想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行』白石隆、白石さや(訳)書籍工房早山.
- 栗原福也編(2009)『シーボルトの日本報告』平凡社.
- 近藤和彦(1998)『文明の表象 英国』山川出版社.
- サイド、エドワード・W.(1997)『オリエンタリズム』平凡社.
- 土屋健治(1994)『インドネシア—思想の系譜』経書書房.
- _____ (1994)「インドネシアにおけるナショナリズムの現在」『日本政治学会年報政治学』第45巻、pp.117-136.
- デ・ヨセリン、P.E.他(著)(1987)『オランダ構造人類学』宮崎恒二(ほか編訳)せりか書房.
- 戸津正勝(1984)「インドネシア共和国憲法とパンチャシラ(建国五原則)」『国土館大学教養論集』、第18、pp.95-98.
- 西川長夫(1995)「日本型国民国家の形成」『幕末・明治期の国民国家形成と文化変容』新曜社.
- フーコー、ミッシェル(1977)『監獄の誕生—監視と賞罰—』田村俣(訳)新潮社.
- ホブスボーム、E.J.(1993)『帝国の時代1875-1914』みすず書房.
- マーシャル、P.J.、ウィリアムス、G.(1989)『野蛮の博物学誌—18世紀イギリスが見た世界』大久保桂子(訳)平凡社
- 松宮秀治(2009)『ミュージアムの思想』白水社年.

67 Hitchcock, Michael, 前掲書, p. 50.

- 宮本謙介 (2003) 『概説インドネシア経済史』 有斐閣.
- 山影進 (1993) 「ナショナリズムと国民国家」『民族に関する基礎研究』 総合研究開発機構.
- 吉田憲司 (1999) 『文化の「発見」』 岩波書店.
- 吉見俊也 (1992) 『博覧会の政治学—まなごしの近代—』 中央公論社.
- レッジ、ジョンD. (著) (1984) 『インドネシア歴史と現在』 中村光男 (訳) サイマル出版会.
- Anderson, Benedict. (1973), *Notes on contemporary Indonesian political communication*. Indonesia, vol. 16.
- Andreas Weber, (2012), *Hybrid Ambitions: Science, Governance, and Empire in the Career of Caspar G.C. Reinwardt (1773-1854)*, Leiden University Press.
- Ardhiati, Yuke. (2013), *Bung Karno dalam 'Panggung Indonesia'*, PT. Wastu Adicitta, Jakarta.
- Badan Pusat Statistik Provinsi Jakarta, *Jumlah Kunjungan Wisatawan ke Obyek Wisata Unggulan Menurut Lokasi di DKI Jakarta 2007-2022* <URL:https://jakarta.bps.go.id/indicator/16/777/2/jumlah-kunjungan-wisatawan-ke-obyek-wisata-unggulan-menurut-lokasi-di-dki-jakarta.html> (参照: 2024年1月8日)
- Dinas Museum dan Sejarah DKI Jakarta (1993), *Monumen dan Patung di Jakarta*, Dinas Museum dan Sejarah DKI Jakarta.
- Dinas Tata Bangunan dan Pemugaran DKI (1978), *Tugu Nasional: Laporan Pembangunan, Pelaksana Pembina Tugu Nasional*.
- Dinas Purbakala (1958), *Laporan Tahunan Dinas Purbakala 1951-52*.
_____ (1962), *Laporan Tahunan Dinas Purbakala 1954*.
- Direktorat Permuseuman (1999), *Perkembangan Permuseuman di Indonesia dari Pelita I-VI*, Departemen Pendidikan Nasional.
- Hendry, J., (2000), *The Orient Strikes Back*. Oxford: Berg.
- Hitchcock, Michael. (2005), 'We Will Know Our Nation Better': *Taman Mini and Nation Building in Indonesia*, Civilization, Vol. LII, no. 2, pp. 45-56.
- Katalog (2010), *Pameran Edhie Soenarso "Monumen"*, Salihara
- Munandar, Agus Aris, et.al (2011), *Sejarah Permuseuman Indonesia*, Direktorat Permuseuman Dirjen Sejarah dan Purbakala.
- Pemberton, John. (1994), *Recollections from 'Beautiful Indonesia' (Somewhere Beyond the Post-modern)*. Public Culture, vol.6, pp.241-262.
- Picard, M. and Wood R. E. (eds)(1997), *Tourism, Ethnicity and the State in Asian and Pacific Societies*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- Sekretariat Negara, "Pidato Presiden pada Pembukaan Rumah Sakit Pertamina Tanggal 6 Januari 1972".
- TMII (2012), *Taman Mini "Indonesia Indah"-Pesona Indonesia*. TMII.

Vaart, Rob Van Der. Pater, Ben De. Oost, Katie. (2004), *Geography in The Netherlands*, Belgeo, 1, <http://belgeo.revues.org/10076> (参照：2023年10月12日).

Yayasan Harapan Kita (1975), *Apa dan Siapa Indonesia Indah*. Yayasan Harapan Kita, Jakarta.

2023年11月26日受付 2024年1月22日受理

ジャクファル・イドルス：国士舘大学21世紀アジア学部 講師